

李白の流水に託する詩情の構造

——特に不断悠久の構造に現われる多様性の分析——

片岡政雄

Basic Type of Symbolic Use of the Phrase "Flowing Water" conveyed by Li-Po
—— Particularly on the analysis of variation seen in the system of eternity ——

MASAO KATAOKA

一
流水を素材にした李詩の表現を観るに、景觀の一部として眼に映じたままを描くのみならず、自らの胸裡に揺曳する情緒をこれに託してゆく傾向がはなはだ顕著である。流水はもとより無情のものであるから、「送殷淑」と題する詩に、「流水無情去、征帆逐吹開」の句を用いている。もしこうした観じ方を極言するならば、ただ流水現象の客観的描写に終始するよりほかにはずであるが、より多感な詩人の主観がこれを許すはずもない。それゆえ「学古思辺」と題する詩では、「流水若有情、悲哀從此分」と流水に有情を感じ取る主観的立場を、「若」に依って直喩的に先ず提示し、ついで情緒的に歌い託している。もう一つ李詩の一般的例として「贈裴十四」を挙げるならば、「黄河落天走東海、万里寫入胸懷間」と歌うごとく無情とか有情とか一々明言しているわけではない。しかし、「走」は流去の迅速を指す感情移入の語であり、また「走」る主体の「黄河」は有情のものとして擬人化されていると見ねばならない。またそれ

でなければ、次句が情緒的に作者の「胸懷の間に瀉ぎ入る」構成となつて来る必然性がないわけである。自然現象がかように情緒的に主観化することは、つまり託喩されていることを意味する。それなにかなる流水の相にいかなる詩情内容を託喩しているのかということになると、それは人間心理の複雑微妙であるごとくにまた錯雑した問題である。これを一応説明せんとすれば、先ず流水の基本的相に対する李白の想念形成の証迹を追究するよりほかない。そこで以前すでに提起しことのある無常迅速・不断悠久・就下帰一・對比差等の基本構造理念⁽¹⁾に拠り、さらに精しく技法的多様性の分析を試みようと思う。次にかかる構造の頻用が、一体何に因るかが当然問題になる。もちろん人生の推移無常に敏感なその性格、江南の流浪に半生を終えたその環境もさることながら、詩の伝統に生きる集大成者としての意欲的發展的集積ではあるまいか。思うに李白の絶句は古来何人も比肩し得ぬ評価をほしきままにしている。それゆえ、これら各構造の解明にはまま絶句との関係に論及するのであるが、

終りにこの總括として絶唱「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」を一例に、構造形成の意欲性ならびに絶句表現の本質性を指摘実証しようと思う。

注

(1) 詳しくは日本中国学会報第十六集所載の「流水に託する譬喩の基本構造の設定並びにこれに拠る詩情の考察——自然觀變質の一措定——」と題する拙論に譲る。

二

A

「夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若夢、為歎幾何」とは、李白の「春夜宴桃李園序」の冒頭で天地と光陰と人生の關係より成り立ち、古來人口に膾炙されている美文である。元來光陰は天地とともに悠久であるが、人生を主にすると極めて迅速に経過し再び帰すすべもない。万物の生滅流転の真相中であって、この点有情の人間の相共に懐く感傷と言わねばならない。かくて人生の推移無常・迅速不歸の感傷、具体的には盛者必衰・生者必滅の憂愁や愛別離苦の孤独感などの歎息は、人生を觀念的に規制する光陰、すなわち時間の迅速不歸を基本とするのが、人間心理の極めて自然な指向ではあるまいか。

それゆえ、流水を有情と感じ易い李白の詩心は、先ずこれに歲月の迅速を託してゆくのである。

(1) 門外一条溪、幾回流歲月（普照寺）

「幾回」は溪流の迅速の相に歲月循環のそれを回数的に託した用語で、要は流水も時間も流れとして共に迅速と觀する意識基底に立っている。これは季節を歌う次の詩句と対照するなら、一層明瞭になるだろう。

(2) 急節謝流水、羈心搖懸旌（古風五十九首・其二十二）

(3) 青春流驚湍、朱明驟回薄（古風五十九首・其五十二）

ところで迅速と感ずる季節と言ひ歲月と言ふも、「序」のいわゆる「光陰」で、つまり日月の運行現象に拠る時間觀念である。それゆえ「歲月」の用語も日月、ことにも日の位置の光度的諸現象に代替し得られるわけである。

(4) 傾暉速短炬、走海無停川（秋獵孟諸夜歸置酒單父東樓觀妓）

(5) 黃河走東溟、白日落西海、逝川与流光、飄忽不相待（古風五十九首・其十一）

兩詩に現れる「走」る流水は日の運行、すなわち時間的推移の迅速を託喻した感情移入の表現として、意義的にも効果的にも重要な役割を果している。

(6) 東流送白日、驟歌蘭蕙芳（留別曹南羣官、之江南）

(7) 惜彼落日暮、愛此寒泉清、西暉逐流水、蕩漾遊子情（遊南陽清冷泉）

これら(6)「東流送白日」や(7)「西暉逐流水」の「送」や「逐」も基本的には前兩首と同じく流水を「走る」もの、すなわち迅速と觀する想念のもとに拘え得た感情移入の語である。かくしげしげ流水の迅速の相に時間を寄託し比喩するわけは、もともと悲歎の感情を寄せているからで、これら託喩關係の対象をそれぞれ「悲東流」「悲徂年」と直叙的に「悲」しむ次の挙例がその確証である。

(8) 路遐迫西照、歲月悲東流（越中秋懷）

(9) 瞻光惜頽髮、閱水悲徂年、北渚既蕩漾、東流自潺湲（秋登巴陵洞庭）

ところでこの二首に現れる悲歎には、ただ単に迅速のみを託喩内容とするだけでなく、これに誘発される不歸の理念の潜在が認められる。それは必ずしもこれら二首の流水表現のみならず、よく考えると、前述の七首を含めてこう言い得られる。と言うのは名吟

「將進酒」の冒頭が、流水託喩における思惟段階の本質を自らに証しているからである。

(10) 君不見黄河之水天上来、奔流至海不復廻、君不見高堂明鏡
悲白髮、朝如青松暮成雪

後二句の「朝」と「暮」との対照に醸成される盛者必衰・生者必滅の憂愁、すなわち迅速不帰の時間の推移に律せられる人生無常の悲歎は、「君不見黄河之水天上来、奔流至海不復廻」より鮮明に反射せられ、実に無限の律動的情熱の籠る歌い振りである。元来流水における迅速と不帰とは相関的で、これを迅速または不帰と観ずれば観ずるほど、それぞれに不帰や迅速の觀念が相互に誘発し合うばかりではなく、その託喩内容たる時間に対してもこの形式そのままに複合的に反射し合い、広く時間の推移觀念に律し去られる人生無常の悲歎を深める。そこで流水の相よりこうして成立する託喩の理論的基盤は、その過程形式上、誘発反射の理と呼称して然るべきであろう。かように考えると、前述の迅速を主体とする表現に対し、当然不帰を主体とするものも措定され得るはずである。

(11) 東流不作西歸水、落花辞条羞故林(白頭吟)

「東流不作西歸水」は明かに流水の不帰の相で、事態の以前に復帰し得ぬ歎きを主体的託喩内容としている。一方これに続く「落花」、これは心理上季節や時間の倏忽、ひいては人生の無常迅速の象徴と解するのが一般的である。かように分析すると、流水の託喩内容には盛者必衰のことわりとして事態の以前に復帰し得ぬ悲歎のみならず、ややもすれば迅速に乖離してしまふ悲哀の随伴もあって、これが詩情の一要素をなしていることが分る。要するに、この流水句も主体的不帰の相が迅速の相を誘発し、それがそのまま時間、ひいては時間に規制される人生に反射する理に拠って成る託喩と規定でき

(12) 古来万事東流水、別君去今何時還(夢遊天姥吟、留別)

「古来万事東流水」における「東流水」の性格は不帰と言うべく、前首(11)「東流不作西歸水」中の「不作西歸」を省略して、「東流水」のみを表出した技法である。しかしこう考えるまでもなく、「古来万事東流水、別君去今何時還」より「流水何時還」という風に直ちに抽出しても証し得られる。というのは、別に「流水何時還」と明確に歌った作例が見られるからである。

(13) 涼風度秋海、吹我鄉思飛、連山去無際、流水何時歸(秋夜旅懷)

「東流不作西歸水」はもとより「古来万事東流水」にしても、またこの「流水何時歸」にしても、流水を不帰の相より観じていることには変わりなく全く同一である。既述のごとく「東流不作西歸水」は、不帰の相に基づく誘発反射の理を踏まえた託喩であったが、これら二首の流水句にも、結局同様の託喩意識が認められる。すなわち「古来万事東流水」は、おのれの不帰を主体とした詠歎の託喩として次句「別君去今何時歸」と連り、また「流水何時歸」は、忽ち涼風の秋海を渡る季節が訪れても、おのれはなお故郷に帰り得ないと歎く、その不帰の趣を流水に託して詠じている。しかしこれらには誘発反射の理に基づく託喩の常として、「時は忽ちに過ぎ行く」の詠歎が仄かに漂い、そこにまた詩情すなわち愛別離苦の孤独感を深化へ導く一種の屈折的律動性を認めないわけにはゆくまい。

かように、流水の相の強調がたとえ迅速にあるにせよ、不帰にあるにせよ、人生の無常迅速に帰着する託喩類型は、いわば無常迅速の構造として設定できよう。つまり無常迅速の構造は誘発反射の理を基本とし、思惟の屈折形式より催す律動性と流水の流下形式より促す律動性が相乗し合い、その詩情には当然心理的快感の裏付けがついている。すなわち、本来悲愁で渋滞すべきその詩情が、無理な

く胸裡に滲透し作者とともにいつしか詠歎を深めるが、これこそ律動性に因る快感の効果にほかならない。もしこの律動的快感の効果を重視するなら、流水の相の迅速性や不帰性については、前における諸例のように必ずしも一々の確に触れる必要もない。というのは、いづれにしても一方の相の気分的斟酌で誘発反射の理が作用し、詩情の全体が余すところなく、また渋滞するところなく把握されるからである。恐らくこういう意識心境で作ったと思われるのが、不帰の語を露わにしない次の諸詩句である。

(14) 四十余帝三百秋、功名事蹟隨東流（金陵歌、送別范宣）

(15) 天文列宿在、霸業大江流（月夜金陵懷古）

(16) 古殿吳花草、深宮晉綺羅、併隨人事滅、東逝与滄波（全陵
三首・其三）

(17) 榮華東流水、万事皆波爛、白日掩徂輝、浮雲無定端（古風
五十九首・其三十九）

(18) 君不見綠波潭水流東海、綠珠樓下花滿園、今日曾無一枝在、
（魯郡堯祠送寶明府薄華遷西京）

(19) 功業嗟落日、容華棄徂川（贈饒陽張司戶燧）

(20) 雨色秋來寒、風敞清江爽、………禍連積怨生、事及徂
川往（酬裴侍御對雨感時見贈）

(21) 扁路方浩浩、徂川去悠悠、徒悲蕙草歇、復聽菱歌愁（月夜
江行、寄崔員外宗之）

(22) 今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看
明月皆若此（把酒問月）

これら諸例の盛者必衰・生者必滅の憂愁、ひいては愛別離苦の孤独感、すなわち人事に関する脆さ、虚しさ等を託諭する流水表現には不帰の語をもって露わにしないにしても、流水と密着する「流」「随」「逝」「棄」「徂」「往」等に拠る限り、その気分なり感覚なり

は主として流去消滅の不帰意識であると思う。また「三百秋」「天文列宿」「吳・晉」「白日」「今日」「落日」「秋來」「古・今」等を字眼に考察すれば、迅速意識をことさらに誘発させる用意である。それゆえこれら流水の託諭意識には、不帰を主としながらも、これに誘発される迅速の予期があると言い得られる。

前諸例の多くとこれらとの表現上の違いを追究するなら的確性と気分性ということになるが、しかし誘発反射の理に拠ることに至っては結局相一致する。ところで、その詩情内容たる悲愁を先ず捨象すれば、理論上そこには残像として流下の律動的快感が残るのみである。李白は元來、これを非常に貴重視した傾向があるが、それは詩の表現形式として当然のことだろうと思う。これを証するものは、遅速・緩急の差があるけれども、例えば「峨眉山月歌」「望天門山」「早発白帝城」「望廬山瀑布水」などの七絶であろう。

峨眉山月半輪秋 影入平羌江水流

夜發清溪向三峽 思君不見下渝州

この「峨眉山月歌」の著しい特徴は短形式二十八字中に、固有名詞五箇つまり十二字を挿入し、流下の路順を顛倒錯乱しているところにある。それでいながら、古來流暢な名歌として激賞されるゆえんは何であらうか。その一つは本来無常迅速の構造中の悲愁を先ず捨象し、つまり流水における律動性の快感に主体を置く表現なるがためではなからうか。こうなると、快感に酔い悲愁を忘れてしまうのが人情である。「早発白帝城」はもとよりその最たるもので、「望天門山」や「望廬山瀑布水」とともにこれら四篇は、起点と着点を感じさせる趣向などよく似ている。

注

(1) 律動性については阿部知二氏著「文学入門」(昭和三十九年一月河出書房新社発行)三六頁に次のごとく説いているが、傾聴すべき説であ

らう。

「すぐれた散文はリズムにみちている。さらにまた、韻律とは、かならずしも声調にあらわし得るようなものだけに限ることはできないであらう。心理的な韻律の快感というものを考えないでは、すぐれた詩や散文の流露感を了解することはできない。昔の詩は、声を出して読まれたものだったが、今日では、多くは眼によって心理的にそのリズムを感じるようになってきている。」

(2) 「朝辞白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿声啼不住、輕舟已過萬重山」起点は「白帝」、着点は「江陵」である。

(3) 「天門中斷楚江開、碧水東流至北迴、兩岸青山相對出、孤帆一片日邊來」起点と着点は結句中に現れている。

(4) 日照香炉生紫煙、遙看瀑布挂前川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天、「望廬山瀑布二首」中の其二で、起点と着点は結句中に現れている。

B

前述の(22)「古人今人如流水」は、主として流水の不帰の相に拠る託喩で誘発反射の理に基づいている。しかし、「古人今人」と接続して述べる意識上の含みよりすれば、別に連続の相も否定できない。すなわち連続の相に拠る人生無常の悲歎も可能ということになるが、それなら理論的にはどう説くべきであろうか。

(23) 水統万古流、亭空千霜月(送王屋山人魏万還屋竝序)

(24) 天津三月時、千門桃与李、朝為斷腸花、暮逐東流水、前水復後水、古今相統流、新人非旧人、年年橋上遊(古風五十九首・其十六)

(25) 謝公離別處、風景每生愁、客散青天月、山空碧水流、池花春映日、窓竹夜鳴秋、今古一相接、長歌懷旧遊(謝公亭)

これら三例の字眼は「万古」ないしは「古今」「今古」にあり、いずれも時間的連続の理念を託していることが、「水統万古流」をはじめ、「前水復後水、古今相統流」や「山空碧水流、……：今古一相接」に拠って明かである。換言すれば流水の不断に連続する相、不尽に悠久なる相に基づきやが上にも万古悠久の情感を深め

る託喩技法であるから、元来これは無常迅速の構造に対し、全く対蹠的な不断悠久の構造として区別されるべきであろう。しかし一方、上句や下句に配せられる盛者必衰・生者必滅の憂愁などを対照的に際立たせる技法となり、結局無常迅速の構造における詩情に傾斜し帰一する。こうした技法は対照的連続表現と言うべく、これを設定すると、本来の不断悠久の構造は表現技法上の一成分ということになる。もちろん本来のそれは前述の諸例や「長波寫萬古、心与雲俱開(金陵鳳凰臺置酒)」の「長波寫萬古」のごとく、認識面においてひたすら時間的連続を意識的に託喩する性格のものであるから、この場合は意識的連続表現と言い換えればよく分るのである。この対照的連続表現に属しながらも、流水の連続相に対する詩情の更に深化したのも見受けられる。

(26) 唯見碧流水、曾無黃石公、歎息此人去、蕭條徐司空(經下邳圯橋懷張子房)

(27) 舞影歌聲散綠池、空餘汴水東流海(梁園吟)

(28) 鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流(登金陵鳳凰臺)

これら三首には時間ないしは流水自体に関する前例のような連続の直叙を全く打ち忘れたごとく、また李白自身のことばをもつてすれば、「曲尽已忘情(春日醉起言志)」の情を忘れたごとく、「唯見碧流水」「空餘汴水東流海」「江自流」と歌われている。すなわち流水を流水のあるがまま述べるところが外面上の特徴であるが、それでは内面上流水の何を対象に「ただ見る」とし、また「空しく餘す」「そのままに流れている」とするか。基本的には客観として変りなき流水の一相、すなわち不断連続のそれであろう。かように流水の不断連続の相を胸中に包蔵しながらこれを直叙しないのは、内的主観を忘却して外的客観に融合しているからにはかならず、その感動の深化している一証である。前の連続を直叙する意識的連続表現に

対し、その認識面において主客一如の連続表現、あるいは融合的連続表現と称すべきで、前後に配する無常の条理よりすれば、この三例に関する限り前例と同じ作用が現出し、類型上結局は対照的連続表現に所属することになる。一体対照的連続表現の一分分たる不断悠久の構造は、本来これだけで直ちに無常迅速の構造に等しいとは考えられない。無常的事象がどこかに配せられて、無常迅速の構造の诗情に急速に傾斜し帰一して来るのである。かような技法を生ずるに至った心理的必然性は何か。それは悠久それ自体に反作用として対照的無常を誘発する論理的可能性が潜在しているからだと言える。推移無常に敏感なのは詩人で、ことにもそうである李白の当然魅せられた技法だったのである。こう考えると流水に寄託するその不断悠久性は、自然に無常と連続を兼ねたものとなって、換言すれば輪廻的意識に質的に転移して、それがそのまま人生の無常に密着して来たことに気付く。こういう意味では、つまりここにも既述の誘発反射の理が見出されるわけである。それゆえ、この対照的連続表現をすでに転移された連続の性格に基づき輪廻的連続表現と称してもよいわけであるが、ここでは一応対照的連続表現と呼称しておこう。そこでこの対照的連続表現を内在律の面より考えると、また流水の相とともに無限に永続する律動的余情効果が出出している。その効果は融合的連続表現と対照された時、ことにも著しく感ぜられるが、これは情念が流水に融合的に密着すればするほどその効果の著しいことを証するものである。李詩の流水託喻に擬人法を頻用する一理由も、実はこうした融合的密着なのである。

一体盛者必衰・生者必滅の無常観に基づく憂愁は、その本質性より愛別離苦に拠る孤独感にも通じる。無常迅速の構造中の諸例を見れば、李白もおそらくこう考えて、これらの憂愁・孤独を流水に寄託していたに違いない。ところで擬人法の効用の本質を悟った李白

は、流水に具わる不断悠久の相に対し、さらに距離性とか方向性とかを与えて、愛別離苦の寄託を図っている。そこにいささか異質の伝達の連続表現とも称すべきものが成立するが、「秋浦吟其一」を一典型にこれを論証しよう。

(29) 秋浦長似秋、蕭条使人愁、客愁不可度、行上東大樓、正西望長安、下見江水流、寄言向江水、汝意憶儂不、遙伝一掬淚、為我達揚州(秋浦吟十七首・其一)

この結びの二句、「遙伝一掬淚、為我達揚州」に配する「伝」「達」の語に依れば、流水に旅愁、すなわち愛別離苦につながる涙の伝達が寄託されて極めて鮮かである。一体この句は、「寄言向江水、汝意憶儂不」の発想を受けて展開している。無情の江水を一個の人格と見なし、これに「汝」と呼び掛けることは、情熱的親近感がなければ到底思い及ばぬことである。技法上より言えば、またそれだけ流水における擬人法の特種な効用を常に意識していたとも言える。ところで李白の流す涙であるが、彼はこうも歌っている。

平生不下淚、於此泣無窮(江夏別宋之悌)

これに拠れば、平生涙を落さないことをもって任じているが、彼の豪快な性格からすれば、十分肯けることである。しかし詩人としての多感性よりすれば決してそうではなく、ひとたび情念の動いて落すその涙は止めどもないのであったことが、「於此泣無窮」や次例の(30)「添成万行淚」に拠っても十二分に察せられる。

(30) 願結九江流、添成万行淚(流夜郎、永華寺、寄壽陽羣官)

(31) 雪点翠雲裘、送君黃鶴樓、………徘徊相顧影、淚下漢江流(江夏送友人)

(32) 流波向海去、欲見終無因、遙將一点淚、遠寄如花人(寄遠十二首・其六)

(33) 及此北望君、相思淚成行、………登岳眺百川、杳然万

恨長（留別曹南羣臣之江南）

はじめの三首(30)(31)(32)中の詩句には、それぞれ九江・漢江、または海に流れ去る流水という風に一定の方向が与えられ、これに止めどもなく流れる涙、あるいは李白自身の涙ではないにしても、情念の籠る一点の涙の伝達を託する意向が、「添」「下」「寄」に明示されている。したがって(33)の「百川」にも遠く海に流れ去る方向を意識した伝達、すなわち「相思涙成行」の「相思」に因る涙の伝達意図が籠っていると思ねばなるまい。しかし、「杳然万恨長」を含む構成上の実際意識よりすれば、涙というよりはむしろ無限の「相思」の伝達⁽¹⁾ということにもなる。

一体「相思」とは必ずしも相互に思い合うのではなく、相手があるって思いやる意味のそれである。ところで無常より催す人間の孤独感、人間に対する切なる愛慕の情を誘発し易い。すなわち「相思」と言っても、基本的には切ない愛慕の情を相手に馳せていることになるわけである。こう解すると、「相思」そのものの直接的伝達も心理の必然として当然あり得るわけで、次の詩句がこれである。

(34) 涇川三百里、若耶羞見之、……寄情与流水、但有長相思（涇川送族弟錡）

元来河川は前にも触れたごとく、それ自体流れの距離感ならびに方向感を伴うが、伝達の連続表現にはこれがもとより重要な要素である。もし直接的と間接的たるを問わず、實在する河川の名称を挙げらば、その伝達がより実感的迫真性を帯びて来るわけである。

この「涇川三百里」も実はこれで、流れの距離と方向、ことにも長い距離を先ず実感的に印象づける描写であるが、実は三十句隔てた結びの二句、「寄情与流水、但有長相思」に現れる対流水託喩の伏線で、まことに用意周到な伝達意図が窺われる。したがってこの

意図を知れば、次の三首の趣旨も容易に理解されるであろう。

(35) 相思無昼夜、東注似長川（送王孝廉鯁省）

(36) 陽臺隔楚水、春草生黃河、相思無日夜、浩蕩若流波（寄遠十二首・其六）

(37) 黃河若不斷、白首長相思（送王屋山人魏万還屋并序）

(35)「相思無昼夜」と(36)「相思無日夜」とは「日」と「昼」との違いで、全く同一の句と言ってよい。また(37)「白首長相思」とともにこれだけでも「相思」の悠久性が窺える。その前後に配置される(35)「東注似長川」や(36)「陽臺隔楚水……浩蕩若流波」、また(37)「黃河若不斷」は、特に流水の連続相に着眼して託喩強調するばかりでなく伝達を囿らんとする構成である。

(38) 別後空愁我、相思一水遥（寄王漢陽）

「相思一水遥」もこれら(35)(37)の詩情表現例に拠れば、「相思（無昼夜）一水遥」の趣と解して決して無理ではあるまい。また別に「遥」は距離感であるから、(35)「東注似長川」の「長」と考えて、「相思一水長」の趣とも解し得られる。かようにいずれよりしても、流水の不断連続の相に託喩する伝達意識が窺えよう。ところで、これらの「相思」はすでに述べたように、相手があつて思いやる意味のそれである。それゆえ、次のような例も挙げられる。

(39) 思君若汶水、浩蕩寄南征（沙邱城下寄杜甫）

(40) 思君不可得、愁見江水碧（江行寄遠）

(41) 思婦若汶水、無日不悠悠（太原早秋）

(39)「思君若汶水」や(40)「思君不可得、愁見江水碧」の「思君」はもとより、(41)「思婦若汶水、無日不悠悠」の「思婦」も帰って会う相手が考えられ、当然「相思」と相通して来るばかりでなく、その構成上にも前掲の五首と相似た情念の寄託が流水に感ぜられる。したがってこれら三首の群も、言い知れぬ「相思」の情を不断

悠久の相に寄せた託喻構造ということになり、濃厚な伝達傾向が認められる。

さてかように涙の伝達表現を辿り行くと、相思のそれに連っていることが分る。しかし相思と言うも、諸例にしばしば窺われるがごとく、結局愛別離苦の情念にはかならず、また思慕の「意」なり「心」なりに換言し得られる。

(42) 宝刀裁流水、無有断絶時、妾意逐君行、纏綿亦如之（自代内贈）

(43) 去年下揚州、相送黄鶴樓、眼看帆去遠、心逐江水流（江夏行）

(42) 「自代内贈」は李白が妻に代って夫なるおのれに贈る詩の意味で、その発想法をはじめ、また波立つ女性心理の表現法など極めて特異な作である。冒頭の二句「宝刀裁流水、無有断絶時」は、後出の(53)「抽刀断水水更流、举杯销愁愁更愁」の発端に類し、不断連続の構造である。ただ著しく違う点は託情そのもので、これは「妾意逐君行、纏綿亦如之」と、無限の思慕の情念を夫の方向に馳せ、その伝達を流水に寄託しているのである。次の(43)「江夏行」は武昌の黄鶴樓にあって揚州に流れ下る長江に思慕の伝達を図る意が、「心逐江水流」の句によく現れており、ことさらに(29)「遥伝一掬淚、為我達揚州」を引証するまでもなからう。

しかし、こうした別離時における思慕の情念もなかなか達せられぬと知る現実的悩みのひとつとして、本来の憂愁哀恨の嗟歎に還元せられた趣の表現を取ってその伝達を計ることもなる。

(44) 绿水解人意、為余西北流、因声玉琴裏、荡漾寄君愁（宿白鷺洲、寄楊江寧）

最も典型的な例であるが、先ず「绿水解人意、為余流西北」には、既述の(29)「汝意憶儂不」と相表裏した親近感や表現効果醸成の

意図が窺われる。すなわち、自分の思いを馳せる方向に同調するごとく流れる绿水に対し、我が意を解するものとして親近感を寄せ、これに融合的気分で「荡漾寄君愁」と、荡漾する限りなき憂愁の伝達を寄託した表現構成である。

(45) 明晨挂帆席、離恨滿滄波（金陵江上遇蓮池隱者）

(46) 食出野田美、酒臨遠水傾、東流若未足、応見別離情（口占）

同じく別離に触れるこれら二首中、(45)「離恨滿滄波」の「離恨」は別離の恨み、「滄波」は不尽の流水の現象で、(46)「東流若未足、応見別離情」と同様の趣旨が斟酌される。しかし、これらの作風も潜在的情緒ながら前者のような発想、すなわち伝達の発想が基調をなしていると解せられよう。またこのように含み考えてこそ詩情も深化するが、その生涯の大半を流浪の旅に終始した李白には、偽らざる体験であったに違いない。

ところで、思慕や憂愁の確実な伝達は原則として言語や書信に依るよりほかにはないはずである。李白の流水に対するかかる発想形式に基づけば、次例の見えるのもまた理の当然であろう。

(47) 西行有東音、寄与長河流（送族弟凝至晏堦、单父三十里）

(48) 裂素写遠意、因之汶陽川（寄東魯二稚子、在金陵作）

(49) 裂素持作書、将寄万里懷、眷眷待遠信、竟歲無人來、……

……如何投水中、流落他人開（感興八首・其三）

これら三首中はじめの(47)「西行有東音、寄与長河流」は、「そなたが西に行つて東のお国なまりを聞いたなら、それはわたしが長河の流れに寄せたものと懐しんでくれよ」の意である。元来お国なまりは、人を懐慕の情に侵らせるものである。この場合は訛りではあるが、やはり慕情の籠るたよりの代替としてその伝達を流水に託する意図に違いない。次の(48)「裂素写遠意」や(49)「裂素持作書」は、もとより書信を認めることである。前者はこの書信を汶陽

の川に託し伝達せんとする表示であり、後者はこうした意図を懐きながらも、他人に開封されんことを気遣う描写である。元来流水に寄託する情念の伝達は、作者の相手に対する意識的流動にほかならず、随処において随時に可能と言ってよい性質のものである。同じく情念の伝達ではあるが、言語や音信ともなれば他人の耳目に対する警戒も脳裡に浮ぶわけで、形式的には詩情の流通、意識の展開が中断される恨みなぎにしもあらずである。李白の流水に託する伝達表現が、言語や書信よりも情意そのものの方が遙かに多い事実はかような理由に拠るものと考えらる。

さて伝達の内容、すなわち「涙」「相思」「思慕」「憂愁」「言語」「書信」というも、結局愛別離苦における無限の情念そのもの、ないしはその現れであるが、流水の連続相にこれらの伝達を図ることは考へ方に拠っては、その心理的負担に堪えかねた発散現象と解せられないだろうか。試みに前後の照応上、伝達の意図の稀薄な次の諸例を挙げればそれと納得されよう。すなわち、これら流水の連続相には、堪え難いまでに感ぜられる悲愁感ないしは孤独感のみが寄託される形式となってくる。この時の李白の心はよりひとしお内向的となつて、託諭関係の一对象、すなわち流水に対して見ねばなるまい。それゆえ、これは伝達の連続表現に対して内向的連続表現と言うべきであらう。

(50) 古情不尽東流水、此地悲風愁白楊(勞勞亭歌)

(51) 横江欲渡風波惡、一水牽愁万里流(横江詞六首・其二)

(52) 鄙人唱白雪、越女歌採蓮、聽此更腸斷、憑厓淚如泉(秋登巴陵望洞庭)

先ず(50)「古情不尽東流水」であるが、流水中には無常觀を潜める懐古の情すなわち「古情」が無限に寄託されている。下旬の「此地悲風愁白楊」こそは、その情の「悲」「愁」であることを示した

ものにほかならない。また險難に際会した旅愁の無限を強調直叙したのが、(51)「一水牽愁万里流」で、つまり両首ともども流水に無限の悲愁を託諭した不断悠久の構造に属するわけである。次の(52)「聽此更腸斷、憑厓淚如泉」は、実は無常迅速の構造中の(9)「瞻光惜顏髮、聞水悲徂年、北渚既蕩漾、東流見潺湲」を受けて結んだ句である。すなわち採蓮の歌声を聴いて無常觀より発する断腸の憂愁を内向的に増すのであるが、そのためしきりと催す涙の状態を胸裡の流水に託する趣をもつて、「涙如泉」と言っている句で、これももちろん不断悠久の構造に属する。

伝達の連続表現で、ともかく憂愁を発散し得た李白にとっては、こうした伝達の余地なき悲哀憂愁の不断連続は確かに堪え難きものであったに違いなく、ついには託諭関係の一对象たる流水に切断の刃を向ける発想ともなる。

(53) 棄我者昨日之日不可留、乱我心者今日之日多煩憂、……：抽刀断水水更流、举杯銷愁愁更愁、人生在世不称意、明朝散髮弄扁舟(宣州謝朓樓、餞別校書叔雲)

今述べた発想は言うまでもなく後の対句で、これらは「刀を抜き流水を断たんとするも断ち得ず、更に勢づき流れ続ける。酒の酔を借り憂愁を忘れんとするも忘れ得ず、更に憂愁が増して来る」と解せられる。まことに空前絶後とも評すべき特異な発想で、すでに「自代内贈」にも(42)「宝刀裁流水、無有断絶時、妾意逐君行、纏綿亦如此」と見え、不断悠久の構造に拠る発想として相共通している。こういうわけで両首における刀で流水を切断する発想そのものは、それぞれ無限の憂愁とか思慕、換言すれば欲求不満に拠るやりばなき感情の発散として、発作的に脳裡をかすめた感受と考えられる。この事理はもう一つ、「南奔書懷」の結びでも間接的ながら証し得られる。すなわち、「感遇明主恩、頗高祖狄言、過江誓流水、

志在清中原、拔劍擊前柱、悲歌難重論」の心理に想到すれば、劍で撃つ対象はたとい誓う流水そのものではないにしても、やはり鬱積する感情の発作的発散が感得されるであろう。

さて李白の流水に依せる連続感は、同じく時間を託喩の基調としながらも、消極的前類型とは別に、積極的表現を取って展開するのである。

(54) 齊公鑿新河、万古流不絶 (題瓜州新河、饒族叔舍人賁)

(55) 淮水不絶波爛高、盛徳未泯生英髦 (贈華州王司士)

(56) 雷声動四境、恵与清漳流 (贈清漳明府姪聿)

(54) 「万古流不絶」も (55) 「淮水不絶波爛高」も共に「不絶」、換言すれば「不断」「不尽」を述べているのが一特徴である。一方「万古流不絶」の肯定表現はすでに前例の対照的連続表現中に掲げた(23)「水統万古流」で流水の同一現象を指し、ともに「万古」という風に悠久に思いを馳せた不断連続・不尽悠久の構造に属する。ただ「水統万古流」はその内容の余りにも対照的に現れる無常迅速に密着し過ぎるので、対照的連続表現の一分となるわけである。ところで(54)「齊公鑿新河、万古流不絶」は、齊澣が新河を切り開いたその功業の悠久を称えたもの、(55)「淮水不絶波爛高、盛徳未泯生英髦」は、その先祖の盛徳に依って淮水のごとく子孫連続し、遂に王司士の現れたことを誉めたものである。(56)「雷声動四境、恵与清漳流」は「与」の語感よりすれば、姪の聿が清漳県の令として人民に施した恩恵が、清漳の流れと与に不尽悠久であると解すべきであろう。これら三首の詩句には暗い無常感が全く影を潜め人間の功業の不朽すなわち悠久を讚美する情感が明るく積極的に流水に託せられている。同じく流水の連続相に拠る託喩ながらも、その詩情の性質が前の類型とは全く違ふ。要するに流水に託喩する事態の連続を理念的に歌い上げ、一応迅速不帰の情感を除外し自立して知徳

の面より起る詩情であるから、これを理念的連続表現として弁別すべき性質のものである。

ところで無常の人生ではあるが、なおこれに希望を掛けるものとして努力の持続を歌い上げるものがあって然るべきであるが、李白にはこれがないように考えられる。徳業の不朽は結局効力の所産と言えどもちろんそれまでだが、しかし知徳の面が主に作用していると考えるべきで、例えば荆軻の易水における歌や漢代の「長歌行」のような意志の面より努力の持続に期待を掛ける表現、すなわち意志的継続表現ではあり得ない。これは李白その人が推移無常に余りにも敏感で、これに傾斜過ぎたそのせいではあるまいか。

さて以上に論じ来たことは技法上や内容上より考究するならば、すでも述べたとおり人間心理の複雑微妙なるごとく極めて複雑微妙な性格を具えておりなお尽し得ないところがある。しかし基本的には流水の不断連続・不尽悠久の相に拠る託喩の類型に過ぎぬゆえ、すでに提示したとおり不断悠久の構造と命じて順当なことが分るのである。それでは以上の論述の筋を概略的に纏めよう。総じてこの構造は、時間の悠久性寄託を基本としながらも技法的差に拠って、人生観照上主として情念的な人生無常の悲歎か、もしくは理念的な徳業不朽の詠歎かまた意志的な努力の持続の強調かの別が生ずる。前者の表現は流水の不断悠久の相を認識の面より意識して時間の連続を託喩する意識的連続表現、もしくは流水や時間の連続に對して言を忘れたごとく展開する主客一如の連続表現、すなわち融合的連続表現を主軸とし、無常迅速の直叙的事象と対照的に連繫させた技法である。それゆえこれを対照的連続表現と言うのであるが、この場合悠久の連続意識は流水の実相より輪廻的意識に転移して来たと考えるべきである。内容的にはつまり無常迅速の構造と相通じ、その情緒は暗く満たされぬ悲歎へと消極的に指向する。しか

し、盛者必衰・生者必滅の憂愁は、無常観としては愛別離苦の孤独感にも通じる。その孤独感は人間に対する思慕の情念を醸成する。そこで、流水の不断連続・不尽悠久の相にこれを寄託する際に、別に触媒的ともいべき距離性とか方向性とかを与えると、感情面として発散的な伝達意識が生じる。こうして相手に対する無限の思慕を寄せる表現、すなわち伝達の連続表現が成立して来るのである。ところで、その伝達意図が欠落し濛朧化すると、その思慕は忽ち本来の無常の憂愁に還元せられ、内向的に無限の孤独・憂愁が鬱積し、発散の手段として託喩関係の一对象たる流水にすら切断の刃を向ける発想ともなる。敢えてこの連続表現に名づけるならば内向的連続などとも言うべきであろう。この二種の伝達のまた内向的連続表現の情緒は、対照的連続表現もしくは無常迅速の構造のそれと同じく、暗く満たされぬ悲歎へと消極的に指向する。それでは理念的な徳業不朽の詠歎や意志的な努力の持続を強調する後者の二表現はどうか。これらはいずれも、流水の不断連続の相に内在する性格に託喩されている。ことに李白の用いた知徳の面として現われる徳業不朽の詠歎、すなわち理念的連続表現であるが、その情緒は明るく満たされた讃仰へと積極的に指向する。たとえ李白は用いなかっただにせよ、意志の面として現われる努力の持続を強調する表現、すなわち意志的連続表現の情緒は、無常の人生に希望を見出してやはり積極的に指向する。それゆえ、これらは前の三表現とは常に相対立する形式である。これら不断連続の構造に属する諸表現の技法的内容的異同の分析はかようであるが、流水の相より醸成される無限の律動的余韻を引くその効果においては、他の構造に比を見ないほどに多い作例数が自証していると言えよう。

注

(1) こうした伝達意識は、流れる涙自体にも斟酌される構成である。

相思若循環、沈席生流泉、流泉咽不掃、独夢関山道（去婦詞）
嬌女字平陽、折花倚桃辺、折花不見我、淚下如流泉（寄東魯二稚子、在金陵作）

はじめの句は「相思若循環」と達せられぬ無限の「相思」を直叙しており、また次の詩句の「不見我」は特にこうした「相思」の誘因だけに止めたものである。しかし、止めどもなく流す涙を「流泉」の不断連続の相に託喩する意識は同一で、ことにも涙の中に故郷を夢みる「流水咽不掃、独夢関山道」に抛れば、涙す流にすらなお「相思」の伝達意識が窺められているのではなからうか。

(2) 岩手大学芸部研究年報 第二〇巻（一九六二）の拙論「陶淵明の詩における親愛感の考察——形成の類型とその究極の一措定——」にも、このことについて論じてある。

(3) 三・Aの注(4)に、このことについて略述しておいた。
(4) 二・Cの注(1)に、このことについて略述しておいた。

C

一体水の流動状態を呈するのは、いわゆる高さより低きに就き海なる一に帰する水自体の性質に基づくことは言うまでもなく、不変不易の原理である。実は前節の無常迅速の相と言い、不断連続の相と言いつの原理に基づいているわけである。李白はまた流れのこの基本原理に着眼して歌い上げる。

(57) 功名富貴若長在、漢水亦応西北流（江上吟）

これは功名富貴の事理について、もしそのまま永続するなら漢水も逆流現象を呈しようと、流水原理を基本とする託喩論理で強く否定し去ったものであり、結局無常迅速の構造における(14)「四十余帝三百年、功名事跡随東流」の抒情的託喩と同一趣旨に帰する。元来無常迅速における豊かな抒情性を、流水原理に基づく論理性のみに転換した技法意識に徴すれば、別に新たな構造すなわち就下帰一の構造を設定し得るのである。

(58) 彷徨庭闕下、歎息光陰逝、未作仲宣詩、先流賈生涕、掛帆

秋江上、不為雲羅制、山海向東傾、百川無尽勢（答高山人兼呈權願二侯）

「山海向東傾、百川無尽勢」は山や海が東方に傾き、そのため百川の流水の勢つき尽きせず海に帰趨する趣を述べた句である。一見、「百川無尽勢」は不断悠久の構造で、絶えず対象に思いを馳せた詩情を託している。一方、「歎息光陰逝」の時間の迅速不帰と対照せられる上から観れば、対照的連続表現ということにもなる。しかし、他方「山海向東傾」を直接的に受ける点、明らかに就下帰一の趣で意識上いささか類型を異にしている。元来流水には、多少の差はあれいろいろな詩情の託される可能性を含み勝ちで、そのいづれが主いづれが従であるかは、主題に拠って定まる性質のものである。⁶⁰ここは上都長安を去り東方に流浪するおのれの宿命感を、もろもろの河川の東海に流れ帰する必然に寄託したものである。

(59) 巨海納百川、麟閣多才賢（金門、答蘇秀才）

(60) 長川豁中流、千里瀉吳會、君心亦如此、包納無小大（贈從弟宜州長史昭）

(59)「百川」や(60)「長川」は多数と長大の区別があるけれども、もとより流水である。また「長川」自体にも細流小流の帰趨が当然考えられる。詩の「長川」はもともとかく考えた描写であるが、しかし(60)「瀉吳會」はその流域地帶吳越地方の果てなる海を予想し得るから、結局(59)「巨海納百川」と同じく「巨海」すなわち大海に瀉ぐ理窟になる。要するにこれらは就下帰一の構造で、託諭意識の重点は諸水を受け入れる「長川」や「巨海」の包容量にあるゆえ、(59)「納」とか(60)「包納」とか述べているわけである。したがってこれらは、李斯の「諫逐客上書」に見える「河海不擇細流、故能就其深」の趣をもって、その包容量に価値判断を挿むのである。すなわち、(59)「麟閣多賢才」と朝廷の多士濟濟や、また

(60)「君心亦如此、包納無小大」と相手の度量の寛大を讚美詠歎する語となつて現れるが、この点、前者(58)と同じく就下帰一の構造でありながら、詩情内容上著しい差異があると言わねばならぬ。

(61) 謬忝燕臺召、而陪郭隗蹶、水流知入海、雲去或從電（江上答崔宣城）

「知」に注目すれば「水流知入海」は例の擬人法的に用いた就下帰一の託諭構造で、つまり「水流」がおのれ、「海」が君ということになる。さて「謬忝燕臺召、而陪郭隗蹶」は、李白自身の宮中に入る事情を述べたものであり、したがってこの託諭は回想追憶の情を深めて詠じたものと解せられる。かくて一旦海に帰趨した河水は潮水と化し、時間的周期をもって溯上するが、やがてまた復帰する。この面に関連づけて託諭したのが次の詩句である。

(62) 潮水定可信、天風難与期、清晨西北転、薄暮東南吹、以此難挂席、佳期益相思、（新林浦阻風、寄友人）

潮水の干満はきつと信とするに足るものの、風はいつ吹くか当てにならぬと述べて、風に船の進行を妨げられ会い得ぬための相思の情を歌った句である。しかしその妨げる風について時間と方向の意識上より述べる対句、「清晨西北転、薄暮東南吹」の配置よりすれば、「潮水定可信」も恐らく干満の周期作用を時間と方向の意識上より拘えた句であろう。こう解すると、潮水には再会や復帰をある一定時に期待する詩情が託せられるわけで、それゆえ後句に、「佳期益相思」と歌い上げているのである。もともとこの詩題は一本に「金陵阻風雪、書懷寄楊江寧」と見え、詩中に「今朝東門柳、夾道垂青糸」とか、また「紛紛江上雪、草草宮中悲」と歌う事実に徴すれば、江寧の令楊某に寄せた早春の作である。楊江寧とは余程意気投合するものがあつたと見え、その他にも「宿白鷺州寄楊江寧」の詩

がある。その冒頭に「朝別朱雀門、暮棲白鷺州」、中ごろに「徒令魂入夢、翻賞夜成秋」と歌っているから、楊江寧に会ってその帰路中に寄せた秋の作ということになる。なおこの二句に続いて、(44)「緑水解人意、為余西北流、因声玉琴裏、蕩漾寄君愁」と結んでいいるが、これは憂愁の伝達の連続表現であることはすでに解説したとおりである。それはともかく両詩をかく考えると、いつかの秋に会った後、いつかの早春に再会しようとした作と想定され、潮水に拠る託諭の心境も察せられるのである。さらにこうした託諭の類型として、次の五言絶句が挙げられる。

(63) 潮水還歸海、流人却到吳、相逢問愁苦、淚盡日南珠(見京兆韋參軍量移東陽二首・其一)

詩は傑作として古來愛誦されているが、左遷の人韋を「流人」と呼びこれを「潮水」の流れに、その愁苦の涙を海中に産する珠玉、すなわち、「日南珠」に関係を持たせた一連の意図よりすれば、詩情が全く潮水の帰趣に託せられていると言ってよい。したがって冒頭の「潮水還歸海」は、詩経の詠法よりすれば興の体で、前詩の「潮水定可信」と合せてもに就下帰一の変型である。

これら(57)より(63)に至る)詩句の託諭表現を概して言えば、就下帰一の相に基づく構造と言えるが、しかし、論理性が強いゆえ、不断連続の構造におけるごとく無限にはその余情を引き難い。この構造に意欲的形跡を止めながらも、以上のように頻用し得なかつたのは、この理をよく知っていたがため、抒情性の豊かな詩人の側面が自らに現れていると評されよう。

注

(1) こうした一例として、文選卷第十四「樂府四首・古辭」中の「長歌行」と題する詩を挙げてこれを解説しよう。

青青園中葵、朝露待日晞、陽春布德沢、万物生光輝、常恐秋節

至、焜黃華葉衰、百川東到海、何時復西歸、少壯不努力、老大徒傷悲

「百川東到海、何時復西歸」が流水の相に託諭された句で、つまり李詩(58)「山海向東傾、百川無尺勢」と相似た諸構造が考えられる。すなわち「無常迅速」か、「不断連続」か、それとも「就下帰一」かが問題になるが、おそらく多くは「無常迅速の構造」とするであろう。しかし、努力を強調する主旨よりして「不断悠久」の構造と考えるを得ない。なぜか。結びの二句中の「少壯」や「老大」は「陽春」と「秋節」、すなわち季節的推移の対応より直接的に導かれ、その「努力」は「東海に流去して帰らず不断に持続する」その百川の流水相より引かれていいる。これが漢代における流水の一般的思考形式であつたと思う。

(2) 文選卷第二十「上書」中に「上書秦始皇一首」と題として載せていいる。清の王琦輯註李太白文集卷之十三に見える注である。

(3) 二首中の其一である。明の李攀竜撰「唐詩選」の「五言絶句」に載つて知られている。この構造を使用したものとしては最高の作であると評価せざるを得ない。

D

さて李白はかく流水に心惹かれる詩人として、もう一つの試みもなしているようである。それは結局流れの属性を基盤に、いろいろな意味づけをもって対比し差等づける託諭であるが、その性格上、対比差等の構造と呼称し他と弁別しよう。

(64) 魯国一杯水、難容横海鱗、仲尼且不敬、況乃尋常人(送魯郡劉長史)

「魯国一杯水、難容横海鱗」は、以下の二句を歌い起しているからこれも詩経における比興の体である。「横海鱗」は大海をわたる大魚で、この大海は前句の「一杯水」と対比され、両者の容量における大小の著しい差等が自然脳裡に描き刻まれる表現である。ここはもちろん流水そのものでないにしても、この対比差等に人生的感懐すなわち包容量の大小を託する強い意識の窺える詩句である。次にまた方向を対比した二首の詩句を挙げよう。

(65) 雨落不上天、水覆難再収、君情与妾意、各自東西流（妾薄命）

(66) 宛溪霜夜聽猿愁、去国長如不繫船、獨憐一雁飛南海、却羨雙溪解北流（寄崔侍御）

(65) 「雨落不上天、水覆難再収」は愛情の衰えを「雨」や「水」の現象に比喻しており、これだけでもすぐ託諭の趣旨が汲み取られる。したがってこれに続く二句中に現われる「東西」の対比も、つまり両首における情意の背馳を確認的に寄託した構成で、作意上当然「妾意」の方向に同情がかかってくる。次の詩句(66)「宛溪霜夜猿愁、去国長如不繫船」は「宛溪」における旅愁を「船」に関連づけた点、すでに流水を意識する表現である。そしてまたこれに続く二句は、飛雁の目指す「南海」と「雙溪」の「北流」という風、流水に関する方向の「南北」の対比で、また北流に重きを置きこれにおのれの志願を託しているから対比差等の構造である。これらは結局河海の大小、東西南北の対比であるが、こうした構造意識の自然として別に清濁・深淺・長短に関するものもある。

(67) 清溪清我心、水色異諸水、借問新安江、見底何如此（清溪行）

清濁の清それ自体すなわち清澄度につき、「清溪」と「新安江」と対比差等つけて、その「清溪」におのれの心の清澄を託して、これに融合する境地を述べている。

(68) 狂周夢蝴蝶、蝴蝶為狂周、一体更變易、万事良悠悠、乃知蓬萊水、復作清淺流（古風五十九首・其九）

「乃知蓬萊水、復作清淺流」はまた一種特異の対比で、「蓬萊水」自体における清濁深淺を対比しその変化を強調してその悠久性を強く否定した託諭である。つまり結果的には無常迅速の構造と同じこととなるが、しかし託諭の技法的基本意識が全く違う。

(69) 伏枕寄賓館、宛同清漳湄、藥物多見饋、珍羞亦兼之、誰道

冥淳深、猶言淺恩慈（感時、留別從兄徐王延年、從弟延陵）

(70) 李白乘舟將欲行、忽聞岸上踏歌聲、桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情（贈王倫）

この詩句や絶句は、深淺の想念に基づき結局相手の恩情や別情と海や河とを直ちに相對比し差等つけた託諭構造である。基本的には例の感情移入の擬人法が取られているのである。表現技法上いささかの違いはあるが、この「深淺」の想念をそのまま「長短」に転化させた対比差等の構造が、次の詩句である。

(71) 請君試問東流水、別意与之誰短長（金陵酒肆留別）

「東流水」より長短の想念が導かれるが、これと「別意」のそれとを對比し差等つけている。すなわち李白は流水をただ自然の景物というよりも、むしろ人間の意識の流れと観じた意識的試みと言い得よう。ことに固有名詞を三たびも入れてある特異な「贈汪倫」の絶句は古来多くの人々に愛誦されて来たが、かように分析すると、決して偶然的の所詠ではなく、こうした対比差等の構造体系における最も意欲的な結晶であるに違いない。

注

(1) 「清溪行」のこの詩句に現れる「新安江」は、梁の沈約の作「新安江水至清、淺深見底、賒京邑游好」に関連がある。両者の技法的差については、後述三・Aの(9)に譲る。

王瑤著「李白」（一九五五年上海人民出版社本一〇四頁）「淒涼的暮年」に誠実な感情の流露した晩年の作として次のことく述べているのは、詩情の解明上また注目すべき説である。

在安徽涇縣、他和桃花潭的一個農民汪倫建立了深厚的交情、他的贈汪倫詩說、

「李白乘舟將欲行、忽聞岸上踏歌聲、桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情」

這樣的詩在李白集中雖然不多、但他對這些人確乎沒有表示過傲

岸の能度、而是流露了一種深厚誠摯的感情的、在他流浪了一生的暮年、他似了在這些人身上發現了他所理想的那種人類應該有的真誠純潔的東西。但年華耗盡、他已快離開人間了。

三

A

さて、李白の詩における流水の託喻表現を種々考察し、これを無常迅速・不断悠久・就下帰一・対比差等の四構造に分類したが、中でも無常迅速・不断悠久の構造に属するものが著しく目立っているようである。それはなぜか。つまり折りに触れて説明したごとく、より律動的快感の余韻を引き易いがためにほかならない。そしてまた無常迅速の構造よりも不断連続の構造の多い理由は、抒情性の極めて豊かな伝達が随伴し易く、江湖を流浪したこの詩人には、自然交情の媒体として最もよい形式なるがためではなからうか。しかし、元来これら四構造の発想は決して李白の創始ではなく、この国の文学・思想の史的発展の下に集積されたものである。すなわち孔子・孟子その他著名な思想家や詩経・楚辭以来六朝に至る詩人たちの間にすでに行われた形式である。中でも無常迅速の構造であるが、かつて論証したとおり、これは不断悠久の構造と見るべき孔子の逝水の歎、すなわち論語「子罕篇」の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜」に端を発し、主として魏晉間の詩人を中軸に転化し定着した形式であると考えざるを得ない。それは具体的には、魏の劉楨・王粲・晉の潘岳・陸機・張協・郭璞等の代表的作例を見れば容易に肯けることである。

- (a) 逝者如流水、哀此遂離分（劉楨「贈五官中郎將」）
- (b) 率彼江流、爰逝靡期（王粲「贈蔡子篤詩」）
- (c) 臨川感流以歎逝兮（潘岳「歎逝賦」）

- (d) 悲哉、川閩水以成川、水滔滔而日度、世閩人而為世、人冉冉而行暮、人何世而弗新、世何人之能故（陸機「秋興賦」）
- (e) 我若西流水、子為東跨岳、慷慨逝言感、徘徊居情育（陸機「贈弟士竜」）
- (f) 大火流坤維、白日馳西陸、……：……：人生瀛海內、忽如鳥過目、川上之歎逝、前脩以自勗（張協「雜詩」）
- (g) 臨川哀年邁、撫心独悲咤（郭璞「遊仙詩十四首・其四」）

ところで李白の無常迅速の構造に拠る作例は、すでに指摘したところでも二十二例の多きに達している。うち別離の憂愁に直かに触れるものは、(2)「急節謝流水、羈心搖懸旌」や(7)「西暉逐流水、蕩漾遊子情」をはじめ、(12)「古來万事東流水、別君去兮何時還」(13)「涼風渡秋海、吹我鄉思飛、連山去無際、流水何時歸」の教例だけで、その他の諸例は概して人生の推移無常の一般的歎息である。いま前に掲げた魏晉代の詩と比較対照しようか。これら李白の教例は劉楨・王粲・陸機の作で言えは(a)(b)(e)に当り、他の(9)「瞻光惜頰髮、閩水悲徂年、北渚既蕩漾、東流自潺湲」が代表する諸例は、潘岳・陸機・張協・郭璞の作で言えは(c)(d)(f)(g)に当るのである。またそれだけに、この構造をひたすら執念深く追究した証迹として十分挙げるに足るであろう。ところでこれら劉楨・王粲・陸機の別情の作であるが、これらを別に宋以後の作例と比較すればいささか複雑になっている。

- (h) 離會雖相親、逝川豈往復、誰謂情可喜、尽言非尺牘（宋・謝瞻「王撫軍廣西陽集別作」）
- (i) 大江流日夜、客心悲未央（齊・謝朓「暫使下都、夜發新林、至京邑、贈西府同僚」）
- (j) 復如東流水、未有西歸日、……：……：相悲各罷酒、何時同促膝（梁・何遜「臨行与故游夜別」）

(k) 蒼茫歲欲晚、辛苦客方行、……………大江靜猶浪、扁舟独
且行、……………湘波各深淺、空軫念歸情(陳・陰鏗「和
傅郎歲暮還湘州」)

これらはもちろんみんな別離の憂愁に触れ託する無常迅速の構造であるが、謝瞻や謝朓の作(h)(i)は何遜の作(j)の末二句「相悲各罷酒、何時同促膝」の凄愴極まりなき歌い上げが無限の情を引く趣で、つまり三首とも意識的に不断連続を兼ね、また陰鏗の作(k)は対比差等の構造をもって結んでいる。前代すなわち魏晉の劉楨・王粲・陸機等と同じく別離の憂愁に触れこれを託する無常迅速の構造とはいえ、時代が下ると単純の用法ではなく、流水の相をよりはっきり意識して複合させる傾向、換言すれば発展させる傾向の深まること以上のとおりである。李白ももちろんこれらよりさらに下った唐代の詩人として、こうした傾向を示さぬはずがない。前に挙げた無常迅速の構造中の(2)「急節謝流水、羈心搖懸旌」の「揺らく」感覚、また(7)「西暉逐流水、蕩漾遊子情」の「蕩漾」すなわち「うごきただよ」感覚などは、主としてこうした不断連続の構造に具わる微妙な律動感の把握を明示したものにほかならない。李白はこうして、詩情の主要素を明示して行く傾向が強いのである。それは(23)「水統万古流、亭空千霜月」や(24)「朝為斷腸花、暮逐東流水、前水復後水、古今相統流、新人非旧人、年年橋上遊」で代表される対照的連続表現にもよく現れている。元來この表現は時間の悠久性を流水の不断悠久の持続相に託する一方、別に無常の条理や事象と対照せしめて、無常迅速の構造と同じ趣を現出させる屈折的な、したがって律動性の豊かな高次の技法である。はつきり「統」の語を表出したのは、その拠り所を明示したものである。もちろんすでに陸機が(d)「秋興賦」において、「水滔滔日度」と歌い、「人何世而弗新、世何人之能故」と詠ずるに見ること

く、またその他の先人にもこうした発想がなかったわけではない。ただ李白の特徴はこれを表現上において誰にでも親しめるように、一層分り易く解明したのであるから、これを詩形式に拠る詩論の内蔵と評しても、また再発見の展開と評してもよいはずである。これもまた元來庶民的なその性格の現れである。

李白はこのように流水の持続相を貴重視した。そこで改めて不断連続・不尽悠久の構造、略言すれば不断悠久の構造ということになるが、これこそ彼に最も頻用された伝達の連続表現の基盤で、これにも前と同様の論評が成立するのである。ところで、詩人が不断悠久の構造を詩の発想に用いたそのはじめは詩経や楚辭である。

(1) 摠彼泉水、亦流于淇、有懷于衛、靡日不思、爰彼諸姬、聊與之謀(邶風・「泉水」)

(m) 沅有芷兮澧有蘭、思公子兮未敢言、荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲、……………捐余袂兮江中、遺余楫兮澧浦、牽汀州杜若、將以遺兮遠者、時不可兮驟得、聊逍遙兮容與(屈原・九歌「湘夫人」)

ともに絶えず対象に思いを馳せる状況が流水に寄託されており、これに後者には伝達意識すらも窺われるが、これが後代になると一層分明になって来る。

(n) 自君之出家、明鏡暗不治、思君如流水、何有窮已時(魏・徐幹「雜詩」)

(o) 河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁、……………人生富貴何所望、恨不早嫁東家王(梁武帝・「河中之水之歌」)

なお、北朝の民歌にはまた「隴頭歌辭」がある。
(p) 隴頭流水、鳴聲幽咽、遠望秦川、心腸斷絶
これら三首中、(n)「思君如流水」は胸裡に描く流水で、實際のそれではないから別として、他には多かれ少かれ伝達の現実性を見え

た意識があると認めねばならない。ところで李白は、(29)「寄言向江水、汝意憶儂不、遙伝一掬淚、為我達揚州」と、擬人法に拠って愛別離苦の涙の伝達をことさら「伝」「達」の語を用い、意識的に明確化している。すでに挙げたようにその他にも「涙」「相想」「思慕」「憂愁」「言語」「書信」等の伝達を寄託する二十四の作例がある。もしこの中から、(32)「遙將一点淚、遠寄如花人」や(34)「寄情与流水、但有長相思」、(44)「綠水解人意、為我西北流、因声玉琴裏、蕩漾寄君愁」、(47)「西行有東音、寄与長河流」、(48)「裂素写遠意、因之汝陽川」等を示せば、直ちにそれと理解されるであろう。そしてまた、別離の作に当って彼はいかに伝達の連続表現に独自の開発の情熱を傾けたかは、この伝達意識の明確化と擬人法の顕著化とに拠って察せられるであろう。

この独自の開発ということになると、自然他の二構造についての特色にも一言触れて置かねばなるまい。

先ず就下婦一の構造であるが、これは孟子・荀子・管子・老子等の例にも見るごとく、思想家の書に現れる率が極めて多い。これに対し詩人に例を求めると、詩経小雅の「水沔」に「沔彼流水、朝宗于海」と現われ、また邶風の「泉水」に「沔彼泉水、亦流于淇」と窺われる程度と言ってもよいほどである。しかしすでに分析解明した李白の使用例を観るに、詩経の託喩よりは可なり多面的でこの構造に属するのが七首にも達しており、このこと自体に発展的な意義を有するとせねばならない。

次に對比差等の構造については、これも孟子をはじめとして多くの思想書に見られ、また詩経召南の「江有汜」、邶風の「泉水」「匏有苦葉」「谷風」、小雅の「沔水」や楚辭の「漁父」等に現れている。この発想を継承した詩中、李詩研究上ことにも注目すべきは梁の沈約の作である。

(9) 眷言訪舟客、兹川信可珍、洞徹随清浅、皎鏡無冬春、千仞

寫喬樹、百丈見遊鱗、滄浪有時浊、清濟濁無津、……

(「新安江水至清、淺深見底、貽京邑游好」)

第三・四句「洞徹随清浅、皎鏡無冬春」は、清くかつ浅いながら水量に増減のないことを意味する。第七・八句「滄浪有時浊、清濟濁無津」は、これと対応する関係で、質的清浊、一定量の有無の相における對比差等の構造である。ところで李白の作中、この構造に属するもの凡そ八首を数えるが、(66)「清溪清我心、水色異諸水、借問新安江、見底何如此」は、沈約の作を念頭に置き、その清澄度につき「清溪」と「新安江」とを対比し差等づけた発想であろう。沈約の作は、「新安江」の「清」と「滄浪」の水の「浊」とを対比差等づける。しかし李白は「浊」には一切触れず、もっぱら「清溪」の「清」と「新安江」の「清」、すなわち「清」そのものを対比差等づけている。元来孟子「離婁上篇」に孺子の歌う「滄浪之水」や楚辭「漁父篇」に漁父の歌うそれと、その系譜を辿れば、その内容的見解は孔子・孟子・漁父という風にそれぞれ異同があるけれども、しかし結局「滄浪の水」自体の清浊に関する対比差等の構造であることには変りない。沈約の作はこの「滄浪の水」の浊を用いて「新安江」の「清」と対比し、そこにいささかの発展を示している。がしかし李白の作に至ると、沈約の発想の一部に基づきながらも、「清」と対照される「浊」という古来の伝統的類型法式には全く触れず、「清」澄度そのものを対比し一層の独自性を發揮している。こうした表現法を会得した李白は、ついにまた流水を人間と人格に見て人格を与え、例えば(71)「請君試問東流水、別意与誰短長」と、流れの長短と別意のそれとを対比し差等づけているが、これなども従来の手法とは全く異った開拓と言える。こう考えると、この構造に挙げられるその他の六首もまたそれぞれに特異性を

具えており、古来の伝統的発想に基づくとは言え、発展的開拓を試みる李白の意欲性は例えばこのようなものである。

以上に論じた事実よりすれば、李白の流水に託する詩情の構造には、一応従来の詩人の発想を基盤に再発見的開拓のあることが分るのであろう。もともと六朝を承けた初唐代の張若虚・衛万をはじめ、すでに述べた王勃、そして李白の先駆として復古を唱道した陳子昂等にもその作例の散見される限り、ことさら強調すべき業績でもないように思われる。だが、詩人としてかく多数集中的に四構造、これにも無常迅速・不断悠久の二構造を多種多様に使用した例はこの国の文学史上劃期的な事実である。それゆえこの事実を認める限り、李白こそこうした構造の集大成者と断ぜざるを得ないのである。

注

(1) 四基本構造の史的展開、ことにも就下帰一・対比差等の二構造については、元来詳しく論述すべきではあるが、第一章の注(1)にも明かにしたように、すでに発表しているゆえ、それに譲って概要に止めた。

(2) 武者小路実篤氏がその著「論語私感」(三笠文庫、昭和二十六年、三笠書房出版本九三頁)に、これは「立派な詩である。」とも、また「川を見るときこの言葉が自づと頭に浮んでくる。」とも述べている。魏晉代の詩人の心を頻りと拘えたのも、実はこうした感覚であると思ふ。

(3) 例えば初唐の詩人王勃の「滕王閣序」の末尾の詩もこれである。

滕王高閣臨江渚、佩玉鳴鑾罷歌舞、画棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨、閑雲潭影日悠悠、物換星移度幾秋、閣中帝子今何在、檻外長江空自流。

「檻外長江空自流」は融合的連続表現で不断連続の構造に属する。表現技法上、「閣中帝子今何在」の無常迅速の事象と対照的になつて対照的連続表現の一分をなし悲愁感が無限に続くことになる。その他、注(5)の事例もこれと属する。

(4) 庶民に親まれる詩人と観る理由の考察は、岩手大学学芸部研究年報第

9巻(一九五五)に載る拙論「李白の庶民的性格」に譲る。

なお、林庚著「詩人李白」(中国古典文学叢刊一九五五年上海文芸聯合出版社本・四頁)に(53)「抽刀斷水水更流、拳杯消愁愁更愁」、(71)「請君試問東流水、別意与之誰短長」を挙げて、人民のよく知っている表現形式を取ったとしている。

這一「水」對於中國民族來說正是何等親切的語言。在此之前、孔子就感歎過「逝者如斯夫、不舍晝夜！」荆軻又唱過「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還。」青溪小姑說：「開門白、側近橋梁、小姑所居、独处無郎。」盧思道從軍行又說：「流水本無斷人腸、堅冰旧來傷馬骨！」正是這一「水」它啓發了中國民族的詩情、這也就是人民所熟悉的表現形式。

荆軻の歌詩はかように知られているが、無常迅速の構造ではなく、元来寒冷の感覚より催す壮烈に勇む意志の持続を述べたものと解せられる。初唐の駱賓王の作、「易水送別」はこの意をよく継いでいる。

此地別燕丹、壯士髮衝冠、昔時人已沒、今日水猶寒、また軻句・結句が対照的連続表現と言うことができる。

(5) 張若虚・衛万の例は、次の節における注(6)に述べる。陳子昂の例は五言排律「白帝城懷古」である。

日落滄江暮、停橈問土風、城臨巴子國、台沒漢王宮、荒服仍周甸、深山尚禹功、巖懸青壁斷、地險碧流通、古木生雲際、歸帆出霧中、川途去無限、客思坐何窮、

不断悠久の構造が結びのに見られる。

B

これら諸構造の集大成者李白は既述のごとく、就下帰一や対比差等の構造に属する絶句に二首の名篇を残した。それでは無常迅速・不断悠久の二構造の精髓を凝結したと目せられる絶句があるだろうか。もしあるとするならば四構造における絶句の表現効果並びに絶句の本質性を考究する上に重要な立証がこれで具備することにもなる。

李詩に関する諸批評を見るに、例えば明の王世貞の「芸苑卮言」における「五七言絶、太白神矣、七言歌行聖」また「五七言絶句、李青蓮為有唐絶唱」にしても、あるいは胡応麟の「詩藪」における

「太白五七言絶、字字神境、篇篇神物」にしても、その絶句形式を激賞して止まないのである。元来絶句は最も短い詩形式であるだけに、余韻とか余情とか言われる構成が必須条件であると考えられる。この条件を充足するには、述べる事象にもことばにも目には残像、耳には残響の反応を身近に起し易いものを選び、それを心に密着させるように構成することである。もともと残像と言ひ残響と言ふも、目や耳に連続的に繰り返される現象という点よりすれば、一種の律動感で、つまりこれが抒情成立の要因をなしていることが明かである。思うに李白の絶句が前述のごとく「神」「絶唱」また「神境」「神物」と評せられる一端にはかかる要因がより豊かに潜んでいるからではなからうか。ところで流水であるが、これは視覚的にも聴覚的にもわれわれの周辺にある、最も身近な律動現象である。これについてはすでに無常迅速の構造の論述中にも、「峨眉山月歌」を中心として「望天門山」「早発白帝城」の三首を例に触れたことである。なお例を唐詩選に徴するに、この三首のほかにも、「黃鶴樓送孟浩然之広陵」「陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至遊洞庭湖」「秋下荆門」「蘇臺覽古」などの七言絶句がある。とりわけ「黃鶴樓送孟浩然之広陵」こそは、前に提起した無常迅速・不断悠久の二構造の精髓を凝結した名篇である。以下にはこれを中心として論証しよう。

(72) 故人西辞黃鶴樓、煙花三月下揚州、孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流、

李白が黃鶴樓に立って揚州に下り行く孟浩然の舟を見送る詩である。詩題の広陵は唐時の揚州の古称で、ここに懐思の詩情の一端が滲み出ており、作者の用意の周到さがすでに窺われる。一・二句はもとより叙事であり、三・四句も一見遠ざかり行く白帆の一点が消え、後に残る長江が天空に押し出している叙景に過ぎない。ところ

で結局「唯見長江天際流」は、なるほど一点消滅の跡を凝視して立ち尽す景観ではあるが、それは決して単なる叙景ではなからう。というのはこの中に、親友に対する思慕の切情、離愁の虚脱、換言すれば愛別離苦の孤独がひしひしと胸に迫り来るものが感ぜられるからである。結句「唯見長江天際流」は主題の要素としてこれほどまでに重要であるが、しかしこれはすでに述べた論定より分析すると、明かに不断連続の構造に属する伝達の連続表現である。なお分析すると、伝達の連続表現であるばかりでなく、主客一如の連続表現、すなわち融合的連続表現で、これがまた転句「孤帆遠影碧空盡」における流去消滅の推移無常すなわち無常迅速の構造理念と対照せられ、いわゆる対照的連続表現を形成しているのである。この時における李白の胸裡には不断悠久の構造中に列挙した(37)「黄河若不断、白首长相思」や(40)「思君不可得、愁见江水碧」(33)「登岳眺百川、杳然万恨长」、また(26)「唯见碧流水、曾无黄石公」等に相通する詩情が秘められていたに違いない。

それならこうした託喩を詩以外の賦や文の形式より求め得られるだろうか。詩の「烟花三月」に拠れば春の時節に当るが、李白には「愁陽春賦」がある。その卒章に「若有一人(一作我所思)兮湘水濱、隔雲霓而見無因、灑別淚於尺波、寄東流于情親、若使春光可攬而不滅兮、吾欲贈天涯之佳人」と詠じている。思う人に対し「灑別淚於尺波、寄東流于情親」と詠ずる叙情の纏綿こそは、不断悠久の構造に属する伝達の連続表現としてきわめて効果的である。もしもた確かな無常の慨嘆を挙げるならば、この句に接続する「若使春光可攬而不滅兮、吾欲贈天涯之佳人」であるが、前後の接続をよく観ずればこれも流水に拠る伝達であることに気付くはずである。なお別に無常迅速の構造の一例として「惜餘春賦」を挙げよう。

………漢之曲兮江之潭、把瑤草兮思何堪、想遊女子峴

北、愁帝于湘南、恨無極兮心氤氳、目眇眇兮憂紛紛、披
 衛情于淇水、結夢于陽雲、春每婦兮花開、花已闌兮春改、
 嘆長河之流速（繆本作春）、送馳波于東海、春不留兮時已
 失、老衰颯兮逾疾、恨不得挂長繩于青天、繫此西飛之白日、
 「嘆長河之流速、送馳波于東海」は、明かに無常迅速の構造である
 が、陽春の流水は、時に敏感な彼をしてとかく人を慕い推移の感傷
 に浸らせる媒体だったのである。それゆえ、「春於姑熟送趙四流炎
 方序」と題する文にも、流水の託喩が窺われる。その見送り励ます
 簡処が次のとおりである。

……：辭高堂而墜心、指絕國以搖悵、天与水遠、雲連
 山長、借光景於頃刻、開壺觴于洲渚、……：僕西登天
 門、望子於西江之上、吾賢可流其道、浮雲其身、通方大適、
 何往不可、何感感于路岐哉、

作者李白が天門山に登って、趙の乗る舟に目を遣ることを「僕西登
 天門、望子於西江之上」と述べている。その時の流水は単に目に映
 るだけのものではあるまい。恐らく、「灑愁陽春賦」の「別淚於尺
 波、寄東流于情親」における情念寄託の媒体であったに違いない。
 それゆえ、次句に「吾賢可流其道云云」と処世の道に關連づけなが
 ら励ます心理、すなわち融合的連続表現構成の基底意識にも通うも
 のになるのである。

いささか間接的とは言え、かような表現事例に照合しても、「孤
 帆遠影碧空尽、唯見長江天際流」には情念伝達の心理があると理解
 できよう。ただ絶句形式なるがため、その規制上表現がかように短
 く、こうした解明には果して唐突独断の誤りがないものだろうか。
 というわけで、この黄鶴樓において、またこの揚州の方向に對し、
 どのような情を籠めて歌っているのか、それが一二直接に引証でき
 ればより簡明に納得されるはずである。この意味で、次に同じく不

断悠久の構造中の二詩を改めて掲げねばならない。

雪点翠雲裘、送君黃鶴樓、黃鶴振玉羽、西飛帝王州、鳳無
 琅玕実、何以贈遠遊、徘徊相顧影、淚下漢江流、

これが(34)「江夏送友人」の詩で、黃鶴樓において友人を見送っ
 たことは、第二句「送君黃鶴樓」で分る。結びの句に「淚下漢江流」
 と涙の流水に下ることを述べたのは、単なる叙事ではなく別離の心
 情の伝達を図るためである。この立証には、次の(32)「秋浦吟其一」
 が挙げられるであろう。

秋浦長似秋、蕭条使人愁、客愁不可渡、行上東大樓、正西
 望長安、下見江水流、寄意向江水、汝意憶儂不、遙伝一掬
 淚、為我達揚州、

明かに流水に對し、「わがため揚州に届けよ」と涙の「伝達」を託
 している。涙はただわけなく出たものではなく、憂愁に抛って催さ
 れるから結局情念の伝達ということになる。黃鶴樓における時、あ
 るいはまた揚州の方向に對した時に示す傾向が以上のとおりで、二
 首の詩情が全く一致している。しかし、これも相異なる二詩中に現れ
 たそれぞれの場所という事例に立っての解釈である。黃鶴樓に立っ
 て揚州を望んだ際、果してこうした詠法が取られるものだろうか。
 こういう疑問を懐けば一応は懐き得る。だが、李白の流水に託する
 詩情の分析に關する限り、こうした疑問は詩を説く態度としては余
 りにも理論に忠実で、いささか過剰であると思う。と言うのは詩情
 とは言っても人間心理の動きである以上、同じ条件の相似た事象に
 對しては、全く背馳した情感がそう多くは考えられないからである。
 まして次の詩の一節に想い到れば、なおさらこうした感を深める。
 去年下揚州、相送黃鶴樓、眼看帆去遠、心逐江水流、
 すでに不断悠久の構造中に挙げた(43)「江夏行」中の詩句である。
 表現形式上追憶ではあるが、相手を見送るといふ点では孟浩然を送

る七絶と同じで、しかも作者の送る場所、相手の向う土地が、それそれつきり「黄鶴樓」「揚州」と出ている。そしてまた「心逐江水流」は明かに別情の伝達にほかならず、押韻字はもとより去り行つた帆の詠じ方など、両首の詩句をそれぞれ照合するとその詩情がびつたり一致し、したがってこの詩句は七絶の注解のような錯覚にさえ陥りかねないほどである。この詩句は五言の表現であるが、恐らく孟浩然を見送った際の追憶に発したものではなからうか。それはともかく、こうした詩情の表現法があるいは五言に、あるいは七言に試みるなど、詩人の苦心の跡、関心の度がありありと察知される。孟浩然を送る七絶が前述のごとく情思そのものには一言も及ばず、ただ辞去する次第の叙事と目に触れる景観とに終始したのは、言を忘れ情を流して流水の不断連続・不尽悠久の絶対相に融合する境地、言わば主客一如の高次の境地より発したものにほかならない。他方その主要句たる結句が、帆影の流去消滅の転句より催される無常迅速と対照されていることはすでに述べたとおりである。ところで李白には別に「贈孟浩然」と題する五律があつて、こうも歌っている。

吾愛孟夫子、風流天下聞、紅顏棄軒冕、白首臥松雲、醉月頻中聖、迷花不事君、高山安可仰、徒此揖清芬、

実に愛敬を尽した真心の籠った詩である。この愛敬する親友を送る李白の胸裡に催す惜別や感傷は恐らく筆舌を絶したものだつたに違いない。七絶はつまり李白の人間の誠実さの現れと解し得られる。一方これまで分析した技法よりすると作為を印象づけられるようである。しかし実際に誦読すれば分るとおり、その痕跡を少しも留めていない。これは主として融合的連続表現の効果に基因するものであり、古来天衣無縫の詩仙と評せられるゆえんの何であるかが、その一部ながらも分るといふものであろう。

さて、別に観点を變えて流水に託論した絶句を検討するならば、すでに論証したごとく、就下帰一の構造に属する五絶、(63)「見京兆章參軍量移東陽、其一」や、対比差等の構造に属する七絶、(70)「贈汪倫」を挙げることができる。これらも実は流水に心惹かれた李白の積極的意欲の作であるに違いない。しかしこれらは、無常迅速・不断悠久の二構造に比較すれば、残像・残響を伴う律動感がいささか乏しく、そのため抒情性がそう豊かであるとは言いがたない。すなわち就下帰一・対比差等に属する作例の少い事實は、また止むを得ないことだったのである。それにしても、従来これほどまでに四基本構造を余すことなく頻用した詩人の見出し難い事實、また意欲的にそれを開拓発展させ絶句に凝結させている事例に徴すれば、李白こそはその集大成者であると再確認できよう。元来絶句は詩の諸形体中最も短くことにも起承転結すなわち律動感を重視する形式である。一方四基本構造の表現効果の本質もまた律動感にあると言つても差支えないはずである。かような意味で両者を合せ考えると、李白が絶句に古今独歩の名声をほしのままにするのも道理であると思ふ。すなわち、李白の絶句詠法の神髓はしばしば試みられた流水の託論表現の効果より自然に悟達したもので、四基本構造の集大成者として当然の帰結と評せざるを得ない。李白の流水に託する詩情には、詩論上実にかように重大な意義を包蔵しているのである。

注

(1) 胡雲翼選輯「李白詩選」(中華民国四十二年・香港正風書店出版本)

第一編張立德著「李白研究」(七八頁)に次のように述べている。

複次、太白の真美的作品究竟怎樣？ 王元美在的宏死厄言上批評說：「五七言絶太白神矣、七言歌行聖矣。五言次之、……………太白の七言律變体、間為之耳。」又說：「五七言絶、李青蓮為有唐絶唱。」宋牧仲漫堂詩說也批評過、他說：「五言絶句、起自梁府、至唐而盛、李白最為擅場。」

(2) 明の胡應麟撰「詩數」内編卷六・近体下・絶句に左のとおり述べてい

る。
太白五七言絶、字字神境、篇篇神物、于麟謂太白即不自知、所以至也、斯言得之、

また次のようにも説いている。

(3) 盛唐長五言絶、不長七言絶者、孟浩然也、長七言絶、不長五言絶者、高適夫也、五七言各極其工者太白、五七言俱無所解者少陵、

後の二首については胡應麟撰「詩数」内篇卷六、近体下・絶句に次のように評している。

(3) 太白七言絶如楊花落尽子規啼、朝辞白帝彩云间、谁家玉笛暗飞声、天门中断楚江开等作、読之真有揮斥八極、凌厲九霄意、賀監謂為謫僊、良不虛也、

(4) 洞庭西望楚江分、水尽南天不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君、霜落荆門江樹空、布帆無恙掛秋風、此行不為鱸魚膾、自愛名山入剡中、旧苑荒臺楊柳新、菱歌清唱不勝春、只今惟有西江月、曾照吳王宮裏人、

(5) 詩情は「月」が中心になつていようであるが、「西江」も一要素をなしていると考えられる。これは初唐の張若虚の七古「春江花月夜」に、「人生代代無窮已、江月年年相似、不知江月照何人、但見長江送流水」を見れば了解できる。同じく初唐の衛万に七古「吳宮怨」の作があつて、「君不見吳王宮閣臨江起、不捲珠簾見江水、……………」抵今惟有西江月、曾照吳王宮裏人」と歌っている。これらはいずれも対照的連続表現に属するが、「吳宮怨」の結びが李白の絶句の転結と合致するのには問題があろう。

(7) リチャーズ著「文芸批評の原理」(岩崎宗治訳・一九六三年三月 垂水書房版本一八四頁)「第十七章 リズムと韻律」に次のごとく述べており参考になる。

リズムと、その形式である韻律は、くり返しと期待によつてえられる。期待されものがくり返す場合でも、それが期待されるだけで現われない場合でも、リズムと韻律の効果は常に期待から生ずる。

付記

拙論は昭和三十八年五月廿五・廿六日、秋田大学にて開催された第十二回東北中国学会における口頭発表「李白の流水に託する詩情の構造——特に交情の媒体として——」の纏めである。